

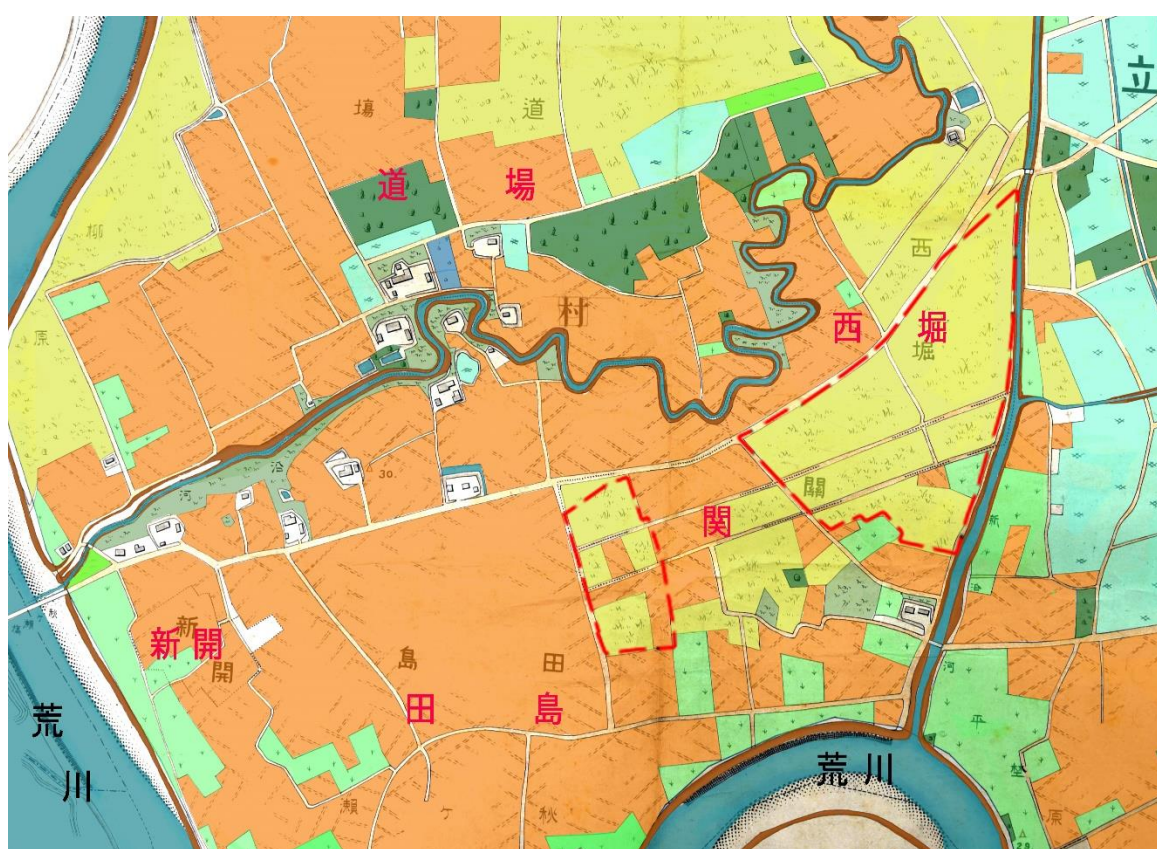


100年前の自生地

自生地の景観

100年前の自生地の周囲は、茅が一面に生い茂る河川敷の原野、と思われがちですが、すぐ北側を江戸時代以来の街道が通り、近くには畑や人家もみられるなど、人の活動と共生した景観が広がっていました。こうした景観は、この100年で大きく移り変わりました。

景観の変遷が物語る環境変化や、近年の気候の変動を受け、自生地では今、次の100年に向けた新たな取組が始まっています。



荒川省略河川台帳平面図 (加筆)

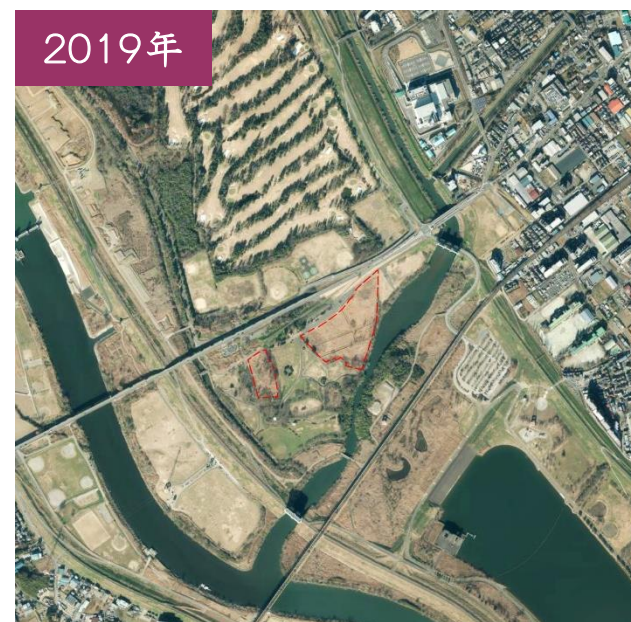
大正6年~8年測量

さいたま市アーカイブズセンター

左の図は、荒川の水害対策事業のために埼玉県が100年前に作成した、自生地周辺の測量図です(土地利用区分と現在の自生地の範囲を色分けと赤の破線で加筆してあります)。

畑としての開墾が進んだ中に広がる「茅地」の自生地と、幾筋も流れる近傍の小河川。この図には、自生地の原風景が詳細に記録されています。

茅地	水田	竹林	河川・湿地
畑	桑園	樹林	堤防



自生地の景観のうつりかわり

左から、100年前の「荒川省略河川台帳平面図」(上段の図)、1948年の航空写真(米軍撮影、国土地理院)、2019年の航空写真です。100年の間になくなった川や流路、新たにできた流路を読み取ることができます。



100年前の自生地

植物学者・三好学がとらえた自生地

植物学者で東京帝国大学教授であった三好学は、天然記念物の保存制度の創設に尽力するとともに、サクラソウ自生地の学術的意義を高く評価し、100年前に田島ヶ原の天然記念物指定を実現しました。三好の著作では、自生地の植生とその特質が美しい図や写真などで紹介されています。



『人生植物学』（1918年）口絵

※植物名は展示解説シートをご参照ください



『天然記念物解説』（1926年）口絵



『増訂改版最新植物学講義 中巻』（1920年）挿図



自生地の植生とサクラソウの特質 —三好学の著作から

春先に、すっと伸ばした茎の先に薄紅色の花を咲かせる可憐なサクラソウ。その花形や色が多様性に富んでいること、そしてノウルシをはじめとする植物群とともに草原に群生していること。三好学は、こうした点を学術的・文化史的に高く評価していました。



三好学が見た自生地

「桜草ノ自生地ニ関スルモノ」（1920年）

三好学が天然記念物指定のための政府委員として行った田島ヶ原調査の報告書の写真。自生地の立地と景観が見事に捉えられています。